



6月は環境月間。今回の市民コラムは、カキ殻を使って、ホタルの住める川にしよという取り組みのようすです。

生きた川造り

松浦ゆかりさん

(次世代のためにがんばる会代表)

「ほ、ほたるが飛んだばい」校長先生が息せき切って駆け寄り、満面の笑みを浮かべた。その時川掃除で汗を流していた私は、スコップを持つ手が止まり、走馬灯のように三年前の環境学習会の場面が脳裏を駆け巡った。

つぶらな瞳に凝視され、「小学校の前の川で遊びたい？」と聞いてみた。汚いと有名な川、もちろん子供達の答えは「汚い」「絶対にイヤ」と即答した。数日後、子供達の礼状に「ホタルが飛びかう川にして欲しい」とあり、「絶対に飛ばせてやるよ！」と誓った。それが「生きた川造り」の始まりだった。

会員と知恵を出し合い、護岸がコンクリートで覆われた川に酸素が供給されるようにカキ殻でS字型の流れと段差を組み、淵や堰を作った。ホタルの寝床のために砂利と土を入れ、岸辺に苔を植栽し、ワイン樽でピオトープを作った。毎月の川掃除・水質検査は、冬の雪が降る時も行った。猛暑の夏には、早朝五時

きて子どもたちのためにと、一縷の望みを託しがんばった。

カキ殻を使った河川浄化は、地元漁協が「全部もってって」と敬遠した海の廃棄物でのリサイクルであり、一石二鳥の取り組みだった。それに科学的酸素供給量(COD)値7の汚い川がカキ殻を投与しただけで、一時間後にCOD値2になった時は信じられなかった。カキ殻のカルシウムは、河川汚染の一番の原因である生活排水のリンと結合し、沈殿させる。最後は自然消滅する。このカルシウムを餌とする小魚やホタルの餌でもあるカワニナが定住する。また、殻のゴツゴツした表面に微生物が寄生し、食物連鎖が発生するという。これらの効能が川本来の自浄作用を回復させ、ホタルが飛ぶような環境を作り上げたのだらう。

地域住民の川に対する考え方も変わりつつある。このカキ殻投与と生活排水の改善を求めるチラシを子供達と共に作成し、一軒一軒配ったからだ。

私達は環境学習会で、一枚の手書きの「食物連鎖」の絵を持ち歩いている。それは、地球上の全ての生物は共生している事、「水の循環」「食物

連鎖」「地球上の大気の循環」すべてが、明日はわが身に廻ってくるという事を教える。生かされている「命」。それを理解したらすすべての生物に優しくなれるはずだ。

私の環境活動のきつかけは、亡き我子に学んだ「命」の価値。あの子の教えてくれた大切な「命」の礎が、今の私の考えでもあり、行動でもある。「川は汚い」と返事した子供達は、今では言うまでもなく、川のゴミを裸足で拾うほどの川の監視役に成長し、毎月の川掃除で共に汗を流している。彼らが夢に描くホタルの乱舞する川の実現に向かって、共に進行中である。

第十四回 地球に優しい作文・活動報告コンテスト
(読売新聞社主催) 作文・活動報告部門一般・外国人の部で、経済産業大臣賞受賞作品(平成十六年十一月二



5月8日に行われた第3回宮地新地カキ殻祭りでは、市内小中高校などを中心に、県内外から約400人が参加し、二見川河口で集められた約5tのカキ殻を宮地小前の新川に投入しました。

市長通信

新八代市の誕生

八代都市六市町村による合併は、協議会設置から二年半、四十一回の協議を経て、三月三十日に県知事に合併の申請を行いました。

八月一日には、人口十四万人、面積六八〇の「新八代市」の発足となり、さらに大きな県南拠点都市が誕生します。

新市は、球磨川や氷川の恵みを受けて、広大な八代平野が広がり、日本一の農業産地を形成します。

さらに、高速交通網の充実や港湾の整備により交通と物流の要衝であるとともに歴史と文化の里としての多くの名所旧跡も数多く点在しています。

そして、妙見祭や全国花火競技大会、九州スリーデーマーチなどの年間通じての祭りイベントや各種スポーツ大会誘致などによる年間交流人口は、約五十万人以上を超える状況にあります。

「新市建設計画」の「新市の将来像」でも、「恵まれた資源を活かし、発展する豊かなまち」「人と地域が主役のまち」を掲げ、住民と行政が協働でまちづくりを推進し、「十五万都市」を目指すこととしています。

何よりも重要なことは、地域の豊かな個性を伸ばし、地域が連携し、新市全体が一体となったまちづくりが必要と考えます。

中島隆利

